

自閉傾向のある統合失調症患者に対する個人作業療法

菊池 琴美¹⁾ 佐々木良範¹⁾ 大久保典子¹⁾ 加藤 拓彦²⁾

¹⁾ 青森保健生活協同組合 生協さくら病院 ²⁾ 弘前大学大学院保健学研究科

【はじめに】

今回、1日の大半を臥床して過ごす自閉傾向のある統合失調症患者（以下、case）に対して、離床を促し活動性を高め、現実世界との関わりを増やすことを目的とし、1年間にわたって個人作業療法（以下、個人OT）を実施した。個別の関わりにより、caseが楽しみを持った生活を送るに至った経過について報告する。なお、本報告にあたりcase本人からの同意を得ている。

【症例紹介】

caseは、統合失調症の80歳代前半女性であり、発症からは約40年が経過している。現在の入院は、他院に約9年間入院し当院へ転院してきたものである。当時、精神症状として幻覚や被害妄想があり、幻覚・妄想に行動が左右され食事や入浴等が遂行できないことがあった。日中の活動状況は、排泄・食事以外終日自室ベッドに臥床し入眠するか、幻聴に聞き入っている様子で過ごしていた。病棟ホールで平日毎日行われている集団作業療法（以下、集団OT）に参加することはなかった。

【治療内容・経過】

自室ベッドに臥床しているcaseに対して、自室から自室の外へと活動範囲を拡大するにあたり、まずは担当作業療法士（以下、OTR）との2者関係を構築することを目的としてベッドサイドでの会話を行うこととした。

OTRに対するcaseの態度は、初回より快く受け入れており、次第にOTRの訪問がcaseの中で定着し楽しみに待ってくれるようになっていった。

訪問時に病室の外の話題を多く取り入れることにより、caseが買い物へ興味を示した。OTRが売店へ一緒に行くことを提案すると、OTR同伴のもと離床し一緒に買い物へ行くようになっていった。

売店へ行く経路と時間を、集団OTを実施している時間に病棟ホールを通るようにし、更なる活動範囲の拡大を図るために集団OTへの参加を促した。始めはOTR同伴の見学から、次第にOTR付き添いのもと活動できるようになっていった。それと同時に、日中の活動状況については、自ら離床し病棟ホールでテレビを見るなどして過ごす時間が増えた。

集団OTへの参加の仕方について、OTR同伴からcaseが一人で参加する機会を増やしていくと、OTRが付き添わなくても集団OTに毎回参加するようになっていった。OTRは、caseの集団OTへの参加状況を集団OT後に振り返る時間を設け、また生活状況についてもフィードバックし、自信付けを行うようにした。すると、case自身が離床時間が増えた変化を実感できるようになり、そのことを「うれしい」と語るようになった。また、買い物についても集団OTへの参加の仕方と同様に、同伴が必要であった状態からcaseが一人でできるようになっていった。

【結果】

個人OT開始後1年経った現在では、精神症状としてはcaseからの幻覚・妄想の訴えは聞かれなくなり、行動が左右されることもなくなった。日中の活動状況については、平日毎日の集団OTへの参加や買い物など自主的な離床ができるようになった。明らかに初回よりも表情が生き生きとし、とりわけ買い物へ行くことを楽しみにしているようであった。

【考察】

今回caseは、1日の大半を自室で臥床し過ごしていた状態から、活動範囲が拡大し買い物や集団OTへの参加など自主的な離床が可能になり、楽しみを持った生活を送るようになった。

OTRの介入について、活動範囲を拡大するために会話においてcaseとOTRとの2者関係を構築しながらcaseの興味を探り、興味を示した買い物の途中に集団OTという次に繋がるような環境を見せながら参加を促していき、徐々に介入を少なくしながら活動状況のフィードバックを行うことでcaseの自信付けを行なった。

以上から、次に行う介入を意図しながら現在のcaseの状態に合わせた活動を工夫し、ペースに合わせた関わりを実施するこのような手法は効果的であり、caseらしい楽しみをもった生活の獲得に寄与したと考えられた。